資料２

首里城扁額製作検討委員会

第３回　検討委員会

2022年3月8日（火）14:00-17:00

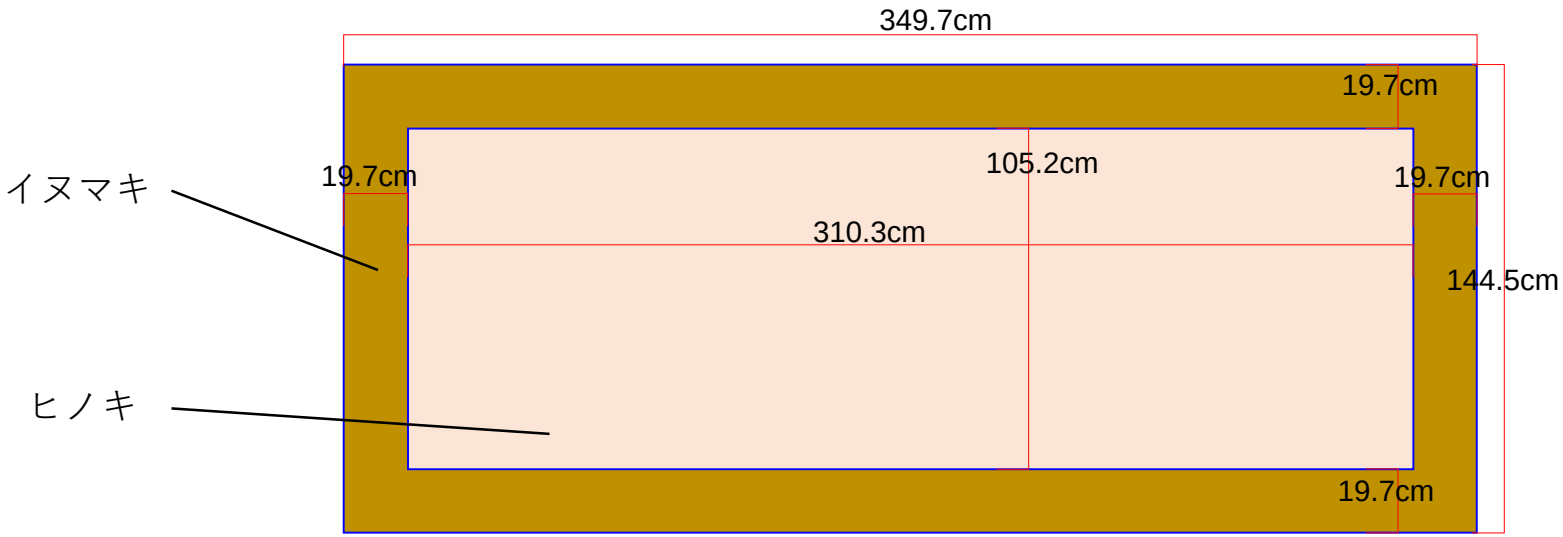
【資料２ 】木工・彫刻の製作方針

2-1.扁額の寸法
2-2.扁額の地板の構造
2-3.扁額の構造
2-4.木材樹種
2-5.文字彫刻
2-6.額縁彫刻

2-1.扁額の寸法

資料２

尚家文書に記載される地板と額縁の寸法を図化した場合、以下のようになる。



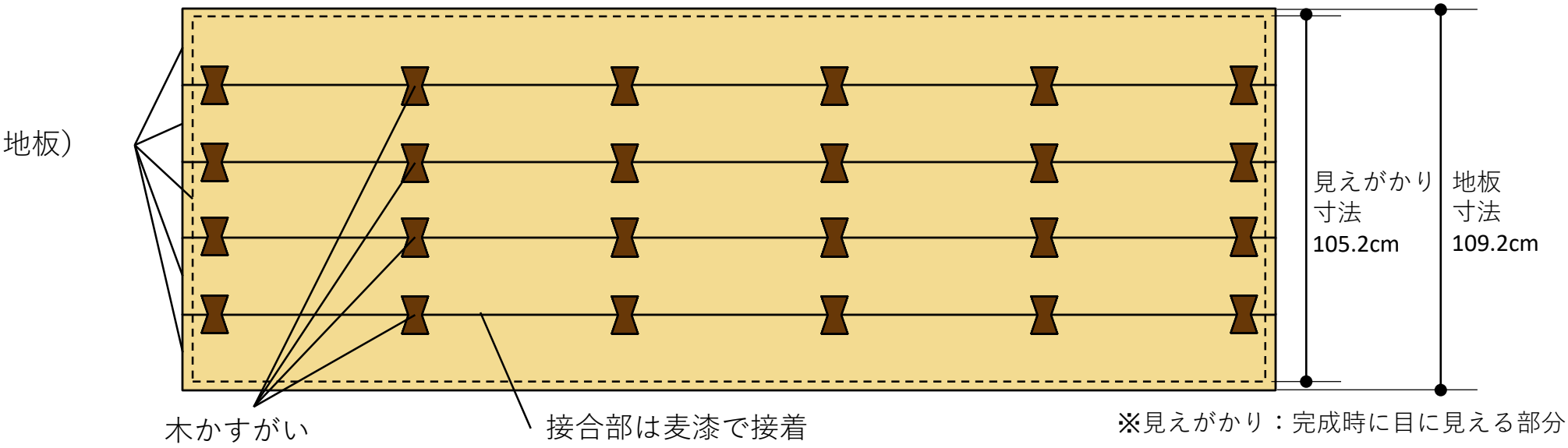
地板と額縁の高・幅の寸法の差から額縁の幅を算出すると、6寸5分（19.7㎝）と想定される。

尚家文書（読み下し文p9上段）
・一御額台壱面／但、鏡高三尺四寸七分、横壱丈弐寸四分、板ア壱寸檜木調、縁高四勺七寸七分、横壱丈壱尺五寸四分樫木調、且鏡板合口壱所ニ付木かせかい＊１六ツ完、麦漆ニ而付合
→鏡板は、高 3 尺 4 寸 7 分（105 ㎝)、横 1 丈 2 寸 4 分（310 ㎝）、板厚 1 寸（3 ㎝）。ヒノキ。
→額縁 高 4 尺 7 寸 7 分（145 ㎝）、横 1 丈 1 尺 5 寸 4 分（350 ㎝）。
→額縁の幅は、（縁高 4 尺 7 寸 7 分ー鏡高 3 尺 4 寸 7 分）÷2＝6 寸5分で19.7㎝。イヌマキ。
・一向龍壱頭／但、長壱尺弐寸、横壱尺壱寸八分、高六寸五分、弐ツ合ニ而檜木調
→向龍壱頭は長1尺2寸（36.3 ㎝）、横 1尺1寸8分（35.7 ㎝）、高6寸5分（19.7 ㎝）。ヒノキ。

2-2.扁額の地板の構造

資料２

（１）地板の枚数、仕口



①「合口壱所ニ付（継ぎ目１か所につき）」という表現から、継ぎ目は複数箇所存在すると考えられるため、３枚以上の板材を継いだ鏡（地板）であると解釈した。

②地板の材料となるヒノキ材については、品質の良い幅20cm前後の柾目材のストックが確認されており、これを参考に幅21～22cmの５枚つなぎと設定する。今後、琉球や中国・台湾等の扁額事例の調査を行い再検討する。

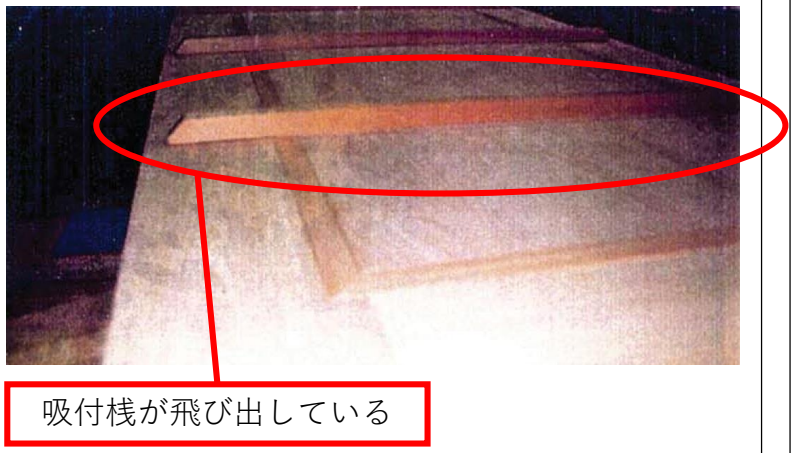
尚家文書（読み下し文p9上段）
・一御額台壱面／但、鏡高三尺四寸七分、横壱丈弐寸四分、板ア壱寸檜木調、縁高四勺七寸七分、横壱丈壱尺五寸四分樫木調、且鏡板合口壱所ニ付木かせかい＊１六ツ完、麦漆ニ而付合
→鏡板の合口（継ぎ目）１か所につき、木かすがい６つずつ。麦漆で接着。

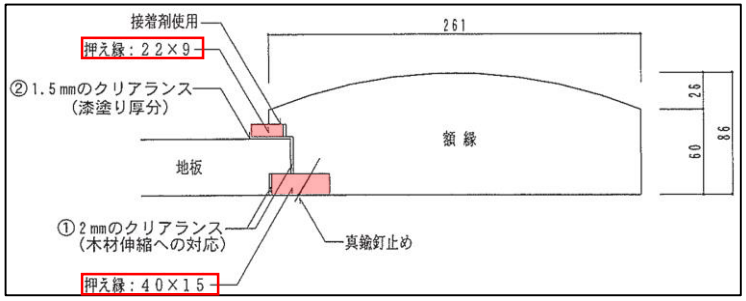
2-3.扁額の構造

資料２

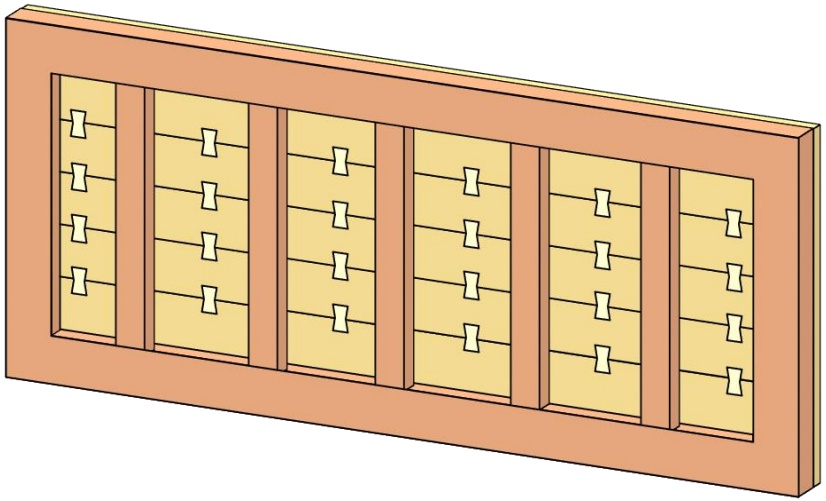
前回製作時の扁額の構造は、表面及び裏面ともに押え縁で地板を押さえ、裏側で吸付桟により額縁、押え縁、地板を組む形としていた。

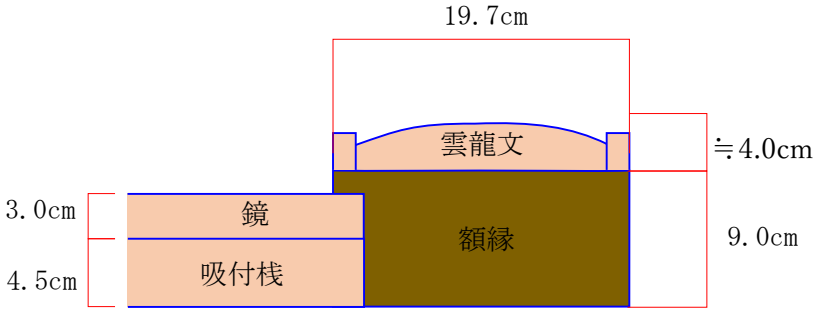
今回調査によると琉球や台湾等の扁額事例では、表面・裏面ともに押え縁は使用せずに裏側は額縁高さ内で吸付桟を差し込み地板を固定する形式が多くみられ、前回製作の構造形式の事例はほとんど確認されなかった。そのため、今回調査による構造形式を基本とするが、今後実施する国内外の扁額事例調査の結果を加えて判断する。





前回製作時の扁額構造



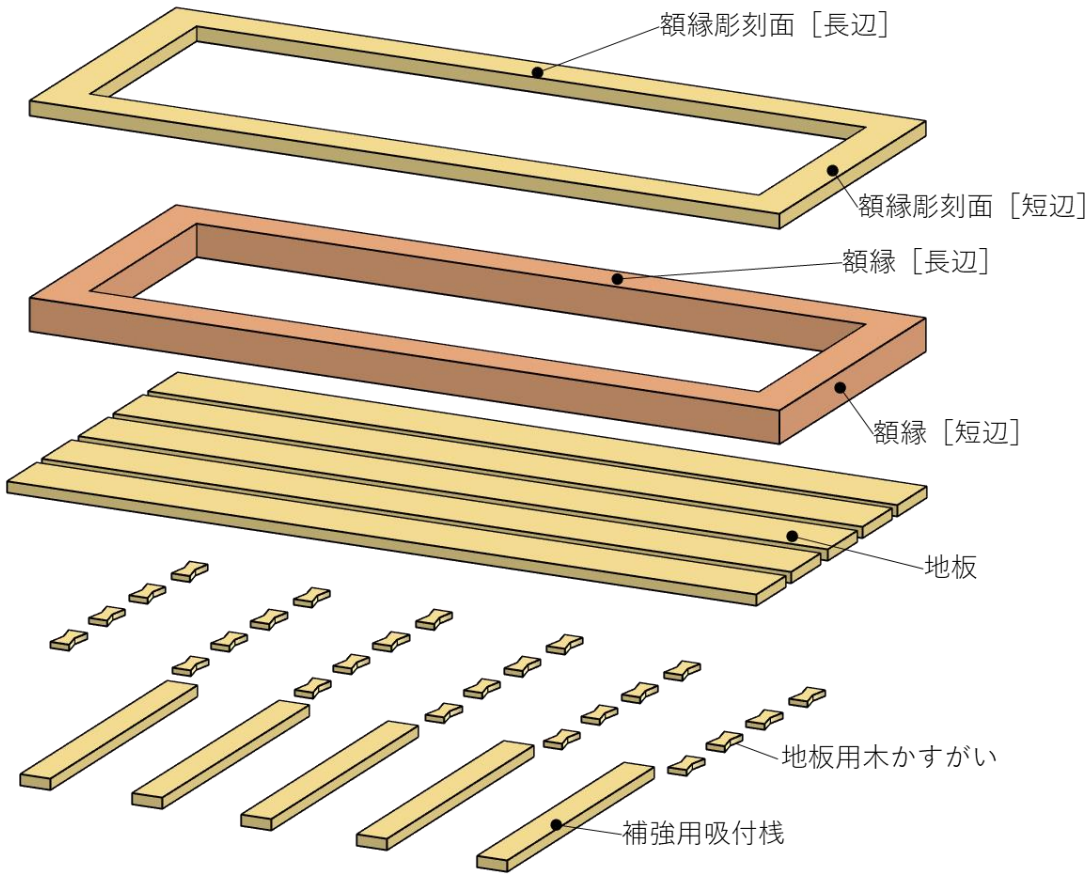


今回検討の扁額構造のイメージ

2-4. 木材樹種

資料２

（１）扁額の木材樹種、数量、寸法



		数量	仕上げ寸法（cm）		
			小口長辺	小口短辺	長さ
額縁彫刻面［長辺］	ヒノキ	2	19.7	4.0	349.7
額縁彫刻面［短辺］	ヒノキ	2	19.7	4.0	144.5
額縁［長辺］	イヌマキ orヒノキ	2	19.7	9.0	349.7
額縁［短辺］	イヌマキ orヒノキ	2	19.7	9.0	144.5
地板	ヒノキ	5	21.84	3.0	314.3
地板用木かすがい	ヒノキ	24	4.6	1.5	9.9
補強吸付桟	ヒノキ	5	4.5	4.5	109.2

2-4. 木材樹種

資料２

（２）「御額持」の木材樹種、数量、寸法等特徴

尚家文書（読み下し文p9下段）

一御額持弐ツ

但、長壱尺弐寸、横壱尺五分、ア四寸完(宛)樫木調

■「御額持」とは、扁額の底辺を支える受け材と考えられる。

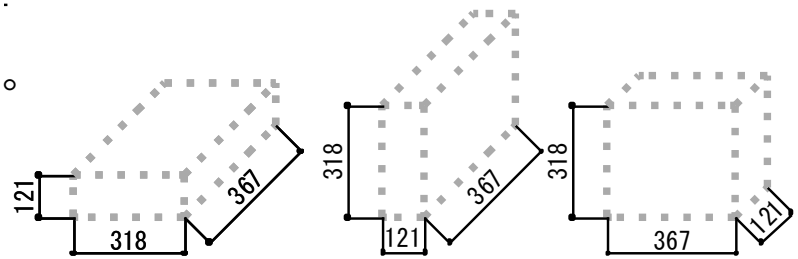
■御額持弐ツ：「御額持」は２つ取り付けられていた。

■「御額持」の大きさは以下のとおり

- 長壱尺弐寸
  「長」は部位のうち最も長い部分の寸法→長さ約367mm
- 横壱尺五分
  「横」は２番目に用いられ、１番目に対し直行方向の寸法→横 約318mm
- ア四寸
  「ア」は厚さ→厚さ約121mm

■樫木調：金属製ではなくチャーギ（イヌマキ）製であった。

■文書の記述だけでは、正面方向が読み取れない。



御額持の立体イメージ

※なお、琉球時代の文書における「御額持」の情報は不明で、
意匠については、情報や事例が現在のところ確認できていない。

2-4. 木材樹種

資料２

（３）イヌマキ材の調達方針

材の選定フローは、現時点で以下の通りを予定している。正殿に掲げた後も変形等が起きることがないよう、材の選定については慎重に検討・判断したい。

≪木材選定の方針≫

１．尚家文書に基づいた仕様を優先する。（地板と龍彫刻はヒノキ材、額縁と御額持はイヌマキ材）

２．可能な限り県産材の使用を優先する。

※上記の方針では扁額の品質を良好に保つことが困難な場合、代替材の使用を視野に入れる。

≪木材選定のフロー≫

①県産イヌマキ　→　必要寸法および共木の条件が満たせる材は無し。

②県外産イヌマキ　→　現時点の在庫調査では、必要寸法および共木の条件を満たせる材あり。

今年度

【材料の条件】

額縁［長辺］：イヌマキ材（県外産材）

額縁［短辺］：イヌマキ材（県外産材）

鏡（地板）　：ヒノキ材

【検討のポイント】

●材の使用について各分野の意見聴取

継続検討

次年度以降

【検討のポイント】

●粗木取り材または木工製作物の乾燥と安定性の確認

・歪み、ひび割れ等の有無、乾燥率の確認

不適

■材料の決定

【材料の条件】（前回仕様）

額縁［長辺］：**ヒノキ材**

額縁［短辺］：**ヒノキ材**

鏡（地板）　：ヒノキ材

適

■材料の決定

【材料の条件】

額縁［長辺］：**イヌマキ材**

額縁［短辺］：**イヌマキ材**

鏡（地板）　：ヒノキ材

2-4. 木材樹種

資料２

（４）ヒノキ材の調達方針

■ヒノキ材の概要

主なヒノキ材としては、長野・岐阜木曽ヒノキ、奈良吉野ヒノキ、三重尾鷲ヒノキ、岡山美作ヒノキ、高知土佐ヒノキ、熊本肥後ヒノキなどがある。扁額製作に使用する材は、人工林よりも天然材の方が良いという意見もある。

■ヒノキ材の調達について

ヒノキ材の調達にあたっては、人工林よりも天然材の方が性質が良いという指摘も考慮しつつ、“市場性”や“経済性”を勘案しながら、柾目や無節、乾燥状態などの必要条件を考慮しつつ、調達先を検討していくこととする。

≪木材選定の方針≫
1．木工（地板）および彫刻（彫刻）がしやすい材を優先する。
2．可能な限り、目の詰まった柾目・無節の材、製材後に乾燥された材を優先する。

≪製作段階の木材選定のフロー≫

市場性：品質のよい材を選ぶ
経済性：コスト面の効率・効果

→

視察による確認（ストックからの材選び）
・目の詰まり（密度）の高さ
・乾燥状況（年数、含水率）

→

試作による確認
・加工（木工、彫刻）のしやすさ
・漆ののりやすさ

→

決定

●ヒノキ材の乾燥工程（案）

	令和３年度	令和４年度	令和５年度
「中山世土」本製作	粗木取り後の乾燥材	地板等本木取り → 自然乾燥 額縁彫刻・ベース木材調査・調達 → 粗木取り → 自然乾燥 → 本木取り → 自然乾燥６ヵ月	地板・文字・落款 額縁龍・七宝繋 額縁ベース木工
試作	粗木取り後の乾燥材	地板等本木取り → 自然乾燥 → 地板・文字・落款彫刻５ヶ月 → 木固め 額縁彫刻・ベース木材調査・調達 → 粗木取り → 自然乾燥 → 本木取り → 自然乾燥 → 額縁龍・七宝繋彫刻５ヶ月 → 木固め 額縁ベース木工５ヶ月 → 木固め	髹漆・加飾 髹漆・加飾 髹漆・加飾

2-5. 文字彫刻

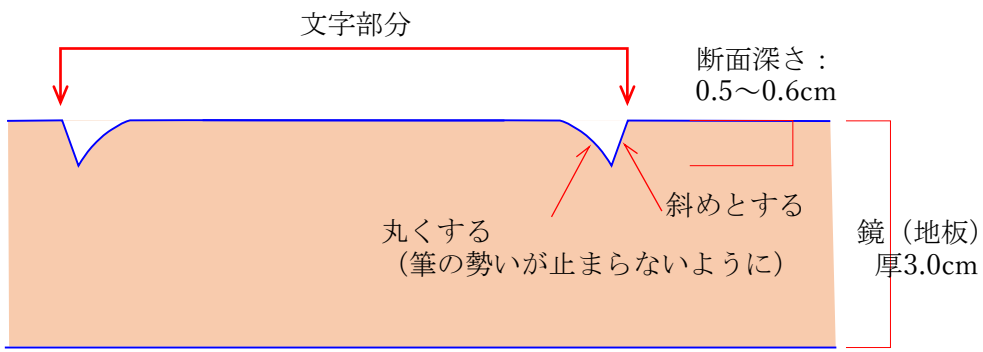
資料２

尚家文書では、文字が金薄磨との記載はあるが、彫刻に関する記載はない。これを受け、肉合彫および浮彫のどちらの可能性も残しつつ、今後扁額事例調査を行い検討していく。

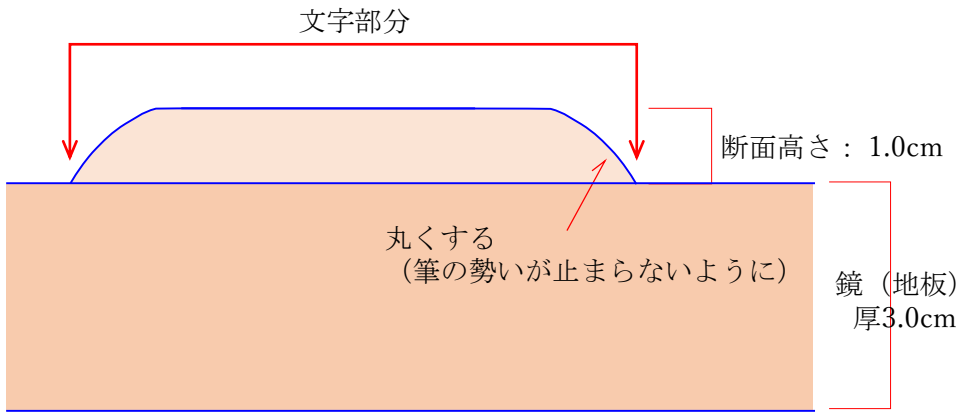
●肉合彫または浮彫の方法
・肉合彫の場合は前回製作を参考にする。
・浮彫の場合は琉球扁額の浮彫事例を参考にする。

参考：琉球扁額の浮彫事例　扁額「致和」
　内間御殿に掲げられていた尚敬王の手による扁額。「球陽」には1737年、内間御殿の改修の際に尚敬王が自ら筆を執り「致和」と書き雇額に仕立てたと記録がある。「致和」扁額の文字は“浮彫”となっており、類例が少ない貴重な資料である。現在は沖縄県立博物館・美術館所蔵。

【肉合彫】イメージ
（前回製作時を参考にした基本断面図）



【浮彫】イメージ
（琉球扁額の浮彫事例を参考にした基本断面図）



2-6. 額縁彫刻

資料２

参考文献による額縁文様（九龍）の情報

胡忠良氏（中国第一檔案館＊）は、檔案の記述から、下賜された御書「永祚瀛壖」の仕様について「扁額の外枠は木刻で金箔の九龍紋で縁取られていたはず」と言及している。

琉球側で御書を木製扁額に仕立てる際には、多少の調整を伴ったにせよ、御書の字形を忠実に写すのと同様に、額縁に描かれた九龍の配置内容も変えずに移したと考えるのが適当である。

扁額の材質と形式に関して、琉球国王へ下賜された扁額は金字木漆扁額であるとする方がいるが、筆者は木帛包鑲扁額だと考える。なぜなら、皇帝が琉球国王へ下賜した扁額はみな室内に置かれるもので、室内扁額になる。清朝宮殿制度では、室内扁額は包鑲絹紙扁額が大多数であり、木漆扁額は少ない。そして内務府檔案も、木包鑲絹扁額であることを裏付けている。『乾隆四年各作成作活計檔』の表装工房の檔案には「太監の越朝鳳の来りて説う。首領の夏安得、鄭愛貴に琉球国王に賞する御筆の『永祚瀛壖』の鵞黄絹本一張を交す、と。伝旨したるに、蒸托（表装工房）に泥金にて九龍を画かしめよ、とあり。此れを欽めり。本月二十日に於て、首領の夏安得、蒸托の画きたる泥金の九龍の御筆本文一張を将て持ち去く」と記されている。このことから分かるように、皇帝が琉球国王へ下賜した扁額は絹本であり、扁額の外枠は木刻で金箔の九龍紋で縁取られていたはずである。

胡忠良「清朝宮中當案にみる琉球国王への皇帝御書扁額の下賜と製作について」（『第6回 琉球・中国交渉史に関するシンポジウム』（沖縄県教育委員会,2002年））130頁より。

・下線は本資料作成事務局による追記。
・「木帛包鑲扁額」の具体仕様は不明。
・鵞黄：ウー・ホワン。HEX：#f5a31f　RGB：245, 163, 31。
・なお「同文式化」について記された「案書 咸豊四年」(『琉球王国評定所文書第八巻』)には、九龍紋が施されていたことを示す記述は見当たらない。

＊中国第一檔案館：明朝、清朝時代の歴史的公文書（歴史檔案）を収蔵する国立の公文書館（北京、紫禁城内）